

## 第2部 ヨーロッパの薫り・ポストンの香り

### Program & Program note

★ R.シューマン(1810～1856)
ピアノ：戸谷 誠子
アラベスク op.18

シューマンがウィーンに滞在していた1839年に作曲した作品。タイトルの‘アラベスク’とは‘アラビア風’という意味で、アラビアの建築や工芸などにみられる唐草模様の装飾のことを指す。音楽では、この唐草模様を連想させる装飾的な性格の楽曲のタイトルにも用いられるが、最初の使用はシューマンだった。ウィーンでアラビア模様の装飾品に触発され、音楽上に表示したのだろう。

### 謝肉祭op.9

シューマン 謝肉祭 OP.9
シューマンのピアノ曲でも特に演奏効果が高く、シューマン独自の詩的情緒にもあふれた代表作。この当時、彼のピアノの師フリードリヒ・ヴィークのもとで学んでいたエルネスティネに好意を抱き、彼女の出身地であるボヘミアのアシュ(Asch)という地名をA→イ, Es→変ホ, c→ハ, h→ロという音名にあてはめ、この動機をもとに作曲することを思いつき、「謝肉祭」はこの4音をいたるところに散りばめた動機で作られている。曲は20曲から成っており、仮装舞踏会に登場するいろいろな人物が次々と登場し、最後にシューマン自身が輝かしい勝利を手にするストーリーになっている。

シューマンの謝肉祭の楽譜

★ F.ショパン(1810～1849)
ピアノ：朝井 大
バラード 第1番 ト短調 op.23

ショパンは生涯で4曲のバラードを作曲しましたが、これらには関連性はなく全く別個に作られたものとされています。若々しい清冽さが光る第1番、ショパンの全作品の中でも最も情熱的な曲の一つの第2番、優しさの中に光と影が交錯する第3番、最も高度で深遠な叙情性を持つ第4番。ポーランド人の友人が作った詩からインスピレーションを受けて歌詞のないピアノ曲を作曲したと伝えられており、いずれも起承転結のあるドラマティックな曲想が印象的な傑作です。演奏時間は10分前後とソナタ作品に次いで規模が大きく、ショパンの魅力や才能が存分に発揮された作品といえることができます。

シューマンのバラードの楽譜

バラード1番はいきなり低音がドーンと鳴り響き、オクターブで謎めいた旋律を奏でるといふ、たいへん印象的な始まり方をします。次に物憂げで寂寥感の漂う、いかにもショパンらしいメロディが続き、オクターブの動機をきっかけに徐々に感情の高まりを見せ、爆発するアルペジオとなって第一主題を締めくくります。曲が進むにしたがって甘美な第二主題、充実した展開、激情のコーダといったまさにドラマティックな展開が待っています。

### バラード 第2番 ヘ長調 op.38

夢想的な第一主題が始まり続いて入る第二主題はさながら吹き荒れる暴風雨の様相となります。この対比が際立ち、聴く人に強い印象を与える曲になっています。低音部で鳴らされる雷鳴のようなトリルをきっかけに怒涛のようなコーダになだれ込み、感情が最高潮に達したところで急に悪夢から覚めたように第一主題が回想され、曲を閉じます。ショパンの繊細な幻想性と、それとは対照的な激しい気性が見事に対比された一曲です。

### バラード 第3番 変イ長調 op.43

4曲あるバラードの中でこの曲だけがサロン的な気品と華やかさがあり、深刻な曲の多いショパンの大作の中では珍しく開放的な明るさを感じられます。第一主題はリズム的な変化や音域の跳躍などがアクセントとなって、諧謔性も感じさせるものになっています。第一主題が静かに終わると、今度は第二主題が始まりそのまま展開部に入っていきますが、この部分の作曲技法はまさに秀逸です。リズムのパターンは第二主題のまま第一主題が短調に変奏されて出てきたり、手の込んだ展開がなされます。そのまま第二主題を展開して曲が盛り上がっていきます。最後は第一主題が華麗に演奏され、華やかな雰囲気のまま曲を閉めます。

### バラード 第4番 ヘ短調 op.52

ショパンの全作品中でもとびきりの傑作とされるのがこの第4番です。この曲の特徴は第一主題の変容です。変奏の手法を用いて、繰り返し出てくるメロディに絶妙な変化を与えています。第一主題は最初に大変シンプルな形で提示されます。二度目に登場するときは、シンプルな雰囲気から一転して幻想性が拡大します。三度目に登場した第一主題は、なんとカノンになっています。四度目に登場した主題は、ノクターンでおなじみの幅広い分散和音にのって、メロディを半音的に分解しつつ流麗な進み方となります。この雰囲気があるまま最後の第二主題へ引き継がれ感情の高まりを見せ、激情が頂点に達するとぶつ切りと曲は中断します。一瞬の静寂ののちに入るピアノツシモの和音は、その後の素晴らしいコーダを一層効果的なものにし、最後はまるで舞台の幕を閉じるかのように長大なアルペジオが鍵盤を駆け下り、曲をしめくくります。

★ F.ショパン(1810～1849)
ピアノ：萩野 陽子
ノクターン 第4番 ヘ長調 op.15-1

1832年から33年にかけて作曲された「3つのノクターン作品15」の第1曲。当時親交の深かった音楽家フェルディナンド・ヒラーに捧げられました。ヒラーは、大変優れたピアニストであっただけでなく、作曲家、指揮者また、教育者としても19世紀のヨーロッパの音楽界では非常に重要な人物でした。ショパンは、練習曲作品10のイギリス版も、彼に捧げています。大変劇的なコントラスト–Semplice,tranquilo(簡素で静かに)の第1部に対し、Con fuoco(燃えたつ様に)の第2部–を持つこの作品は4分間のうちに、青年ショパンの秘めた情熱がほとばしるように表現しぎられています。

★ F.ショパン(1810～1849)
ピアノ：朝井 大
ノクターン 第8番 変ニ長調 op.27-2

「フィオロウーラの修練であり、もっとも優雅な作品のひとつ」「貴婦人のノクターン」などと評された、「2つのノクターン作品27」の第2曲。フィオロウーラとは、イタリア語の“フィオーレ 花”からの派生語で、まるで花が咲き誇るように装飾を施した19世紀のオペラのアリアに見られる技法の事を言います。一貫して奏でられる左手のアルペジオにのせて、美しい旋律が奏でられます。

★ F.リスト=R.ワーグナー(1811～1886)(1818～1883)
歌劇「トリスタンとイゾルデ」より イゾルデの愛の死

「イゾルデの愛の死」は、上演時間がおよそ4時間に渡る大作、歌劇「トリスタンとイゾルデ」の最後の場面で、深傷を負ったトリスタンがイゾルデの腕の中で息を引き取り、悲しみと絶望にくれたイゾルデが神々しく歌い上げるアリアです。媚薬を飲んで烈しく惹かれあつた主人公達の愛の永遠性を表現するために、ワーグナーはいわゆる無限旋律という手法を駆使して作曲しました。リストは、このあまりに美しい歌劇から何曲かを、自ら演奏するためにピアノ独奏用に編曲しています。

★ F.リスト=F.ブゾーニ(1811～1886)(1866～1924)
モーツァルトの歌劇「フィガロの結婚」の2つの主題による大幻想曲

リストが手がけ、未完のままだったものをブゾーニが完成させた作品。歌劇「フィガロの結婚」の1幕の最後に伯爵から軍隊行きを命ぜられた小姓ケルビーノをからかい励ますフィガロのアリア“もう飛びまいぞこの蝶々”と、2幕で美しい伯爵夫人を慕うケルビーノのアリア“恋とはどんなもの?”を巧みに組み合わせ編曲されています。

★ A.ドヴォルザーク(1841～1904)
ヴァイオリン：岡田 祐美(ピアノ柳河瀬 貴子)
ソナチネ ト長調 op.100

第1楽章 Allegro risoluto
第2楽章 Larghetto
第3楽章 Scherzo: Molto vivace
第4楽章 Finale: Allegro

このソナチネは、ドヴォルザークが我が子の音楽的能力を育ててゆくために1893年、米国滞在中に書いた最後の室内楽曲である。「これは若者向けのつもりで作曲しましたが、大人であっても、この曲と対話することができるはずです」と述べている。アメリカ先住民族の民謡や黒人霊歌に靈感を受けた旋律主題が使われている。

★ A.バツジーニ(1818～1897)
妖精の踊り op.25

非常に強烈なヴァイオリン技巧を見せる作品で、ヴァイオリニストの演奏会最後の見せ物として登場する。トレモロ重音と高音域への音階、跳躍と移弦、さらにはフラジオレットの多用など、ヴァイオリンの技巧が充満しており、聴衆に衝撃すら与える。中間部ではリッツェサルタートや左手ピチカートなど一刻の猶予もなくテクニックが披露される。